

先週、私たちはパウロの回心の出来事を聖書から聴きました。それまで、自分の力で神様のために働こうとしていたパウロは、復活の主イエス・キリストと出会い、すべての力を失ってしまいます。けれどもそれは、パウロが自分の力によって生きるのではなく、神様の光を携えていく土の器として用いられていくために必要なことでした。こうしてパウロは、まことの神の方へと回心をします。

ところで、キリスト教では回心という言葉で、回る心と書きます。一般的に改心といいますと、心を改めるという字を書きます。ところがキリスト教では、回心とは心を改めることではなく、それまで神様から離れていた人が神様の方向へ180度向きを変える方向転換という意味が込められています。聖書に出てくる「悔い改め」という言葉は、ギリシア語では「メタノイア」と言いますが、これは「悔い改め」というよりはむしろ、向きを変える、方向転換という意味を持っている言葉です。それまで神様の方向を向いていなかった者、神様の方を向いていないというのは、的である神様から私たちの目や心が外れていく「的外れ」、ギリシア語では「ハマルティア」という言葉で日本語聖書では「罪」と訳されますが、この的外れという罪を犯した者が、神様の方へと向き直る。方向転換をして神様に立ち返る。これを聖書では「悔い改め」と表現するのですが、その内容からすれば、むしろ「回心」という言葉の方がふさわしいように思います。

キリストに出会う前のパウロは、神様を知らなかったわけではありませんでした。いやむしろ、自分の信じている神様に熱心であろうとしたために、偽物と思い込んでいたイエス・キリストやキリストを信じる者たちを迫害してきました。パウロは神を知らなかったわけではなく、イエス・キリストが神から送られてきた独り子であることを知らなかった。つまり、自分で勝手に神様のことを思い込んでいた独りよがりの信仰だったわけです。そんなパウロがイエス・キリストと出会い、イエス・キリストをこの世に送ってくださった神様に立ち返った。聖書ではこのように、神を知らなかった者が神様に立ち返る出来事だけではなく、神様に対して誤った考えを持っている者が、まことの神様を正しく認識し直す。この出来事も、回心と表現するのです。私たちも同じように、自分の頭の中だけで勝手に神様の姿を作り上げるのではなく、聖書を読み、教会学校でお互いの言葉を語り合い聴き合うことによって、まことの神様と出会っていくことが大切なことなのです。

さて、そのようにして回心したパウロは、すぐに宣教活動を始めます。今日の聖書の箇所少し前、20節を読んでみますと、イエス・キリストと出会ってすっかり変えられてしまったパウロは、すぐにあちこちの会堂で「この人こそ神の子である」と言って、イエス様のことを宣べ伝えたことが記されています。そして21節には、それまでのパウロのことを知っていた人たちが、「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか」と言って非常に驚いたことが報告されています。まわりの人たちをそれほど驚かせるパウロの回心でしたが、私たちが今日、注目したいのは、パウロが回心したのは彼が宣教活動に召されるためであったという点です。つまり、彼はキリストの宣教者となるために回心をしたのです。

キリスト教では、よく回心すると救われる、というように言われます。イエス・キリス

トを信じた者だけが救われる。けれども、それは本当でしょうか。私は、そうではないと考えています。なぜなら、イエス・キリストの十字架の贖いは、信じている者のためだけではなく、信じていない者のためにもあったからです。つまり、救いはすでにすべての人の上に及んでいるのです。ただ、その事実を認めるのか、認めないのか。キリストを信じる者と信じない者との違いは、ただそこにあるのだらうと私は思います。ところが、自分は救われていると信じていない人にとっては、救いがその人に及んでいないのと同じことですから、結果的には救われていないのと同じなのです。ですから、キリストを信じた者、キリストに回心した者は、それによって救いが得られたわけではなく、自分にもキリストの救いが及んでいることを認めた者、それを知っただけのことなのです。それでは、私たちが回心するということが、ただすでに神様によって救われているという事実を認めるだけであるとするなら、私たちの回心によって、いったい何が変わるのでしょうか。

パウロは回心することによって、キリスト者を迫害する者からキリストを宣べ伝える者、宣教者へと変えられていったのです。パウロは迫害する者から迫害される者へ、そして迫害されてもイエス・キリストを宣べ伝える者へと変えられていった。つまり、パウロは宣教者となるために、イエス・キリストと出会い、変えられたのです。

キリストの宣教者としての働きは、キリストの証人としての働きです。キリストの証人とは、キリストを証言すること。自分の話をするものではありません。今月から毎月第2週の主日礼拝の中で証しをしていただきます。これはキリストの証人としての証しです。証人というのはもともと法廷用語で、裁判所で証言をする証人のことを指します。そしてその証人とは、たとえば交通事故の現場にいた証人であれば、その事故を見た目撃者ということになります。事故現場にいた人は、事故がどのように起こったのか、目撃したことを証言します。信号が赤だったのにあの車が侵入してきた、というようにその場で見たことを証言するのです。そこに自分の思いや感情を入れてはなりません。たとえば、「私が思うに、あの人は居眠りしていたのではないのでしょうか」というような、そんな個人的な感想はいりません。そんなことは、警察がきちんと事実を確認すればよいこと。目撃者はただ見たことだけを証言するのです。キリストの証人も同じです。キリストが私にしてくださったこと、神様が私に臨んでくださったことを語るのです。そこに個人的な感情や思いはまったく必要ありません。毎月、証しをしていただくにあたって、ぜひ、このことを心に留めながら準備していただきたいと思います。

キリストの証人としての働き。パウロはキリストに出会う前、キリスト者を迫害する者でした。自分の力に頼り、何とかして神様の役に立とうとして、キリスト者を迫害していました。フィリピの信徒への手紙3章5節以下で、パウロはこう語っています。新約聖書364ページになります。【わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。】 また、ガラテヤの信徒への手紙1章13節以下では、こう語っています。新約聖書342ページになります。【あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。】

キリストに出会う前、クリスチャンを脅かす迫害者であったパウロが、キリストと出会ってから、命がけでキリストの福音を宣べ伝える者へと変えられていきます。自分で勝手に神様のイメージを作り上げ、まことの神様から離れてしまっていたパウロは、キリストとの出会いを通してまことの神様の方へと向き直りますが、この方向転換によってパウロの人生、パウロの生き方も180度変わっていきました。パウロは、迫害者から迫害される者へ、力ある者から力のない者へと変えられていったのです。そして、このパウロの生き方が変えられていった出来事こそが、パウロを知っている人たちに対する、大きな証しの出来事となるのです。キリストに出会って、生き方が変えられたことを人々に示すこと。言葉によらない伝道。これも大きな証しの出来事なのです。

そして、キリストに出会ったパウロは、先週の礼拝で一緒に学びましたように、自分は光ではなく、光を入れる土の器であることを教えられます。土の器は、その中の光であるイエス・キリストを人々に示すことによって、その価値が生まれます。土の器が、自分の内にある光を誰にも明かさず、ただ自分の土の器の中だけにとどめておくのであれば、その土の器はもはや土の器以上の価値を持つことはありません。土の器は、その中にある光を人々に指し示すことによって、その価値を増すのです。パウロはキリストに出会って、人生が一変します。それまで自分の力を誇り、キリスト者を迫害していた者が、力のない者、迫害される者となりました。けれどもその変化は、パウロにとって、決して残念なことではありませんでした。フィリピの信徒への手紙3章5節以下でパウロはこう語ります。新約聖書364ページです。【わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非の打ちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。】パウロはここで、キリストに出会って自分が失ったもの、それまでに彼が一生懸命に力を尽くして得てきた地位や名誉や権力に加えてヘブライ人であるという出生に対する誇りなど、それら一切のものは損失であり、塵あくとであると語ります。そして、そのようなものでは決して代えることのできない主イエス・キリストを知ることのあまりのすばらしさに出会ったと語るのです。

みなさんは、とてもおいしいレストランに行って、おいしい料理に出会ったとき、お友だちに伝えたいとは思いませんか。あるいは、風光明媚なとても素晴らしい場所に出かけたとき、それを誰かに伝えたいとは思いませんか。近頃はSNSで、自分の知り合い以外の不特定多数の人たちにも伝えることが当たり前のようになっているようですが、おいしい料理や素晴らしい景色を他の人たちに分かち合うのであれば、なおさら、イエス・キリストを他の人たちに分かち合わずにはいられないのではないでしょうか。キリストに出会うことのすばらしさを伝えずにはいられない。そんな出来事が、ヨハネによる福音書4章の

サマリアの女性とイエス様が井戸端で出会うというあの有名な出来事の中に記されています。サマリア人の村で、とある理由から村人たちと顔を合わせることができなかったサマリアの女性が、救い主イエス・キリストと出会うことで変えられていきます。イエス様との出会いで変えられたこの女性は、それまで彼女が顔を合わせることをとてもいやがっていた村人たちのところへ出かけていきます。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません」。村人たちは考えました。あれほど自分たちを避けていた女性が、喜び勇んで自分たちのところへやってきて、「メシアに出会った」と証言した。これはきっと何かあったに違いない。そう考えた村の人たちは、イエス様の元へと出かけていき、イエス様の言葉を聞いて信じます。サマリアの女性は、救い主イエス・キリストと出会った喜びを、あれほど嫌がっていた村人たちにも伝えずにはいられなかったのです。伝道とは、自分がイエス様と出会い、どれだけの恵みを、どれほどの喜びをいただいたかを伝えることなのです。私たちも、教会に来てよかった、イエス様と出会うよかったと感じているなら、その喜びを一人でも多くの人たちに伝えていきたい。そんな情熱が、あのサマリアの女性をあれほど嫌っていた村人たちの元へと向かわせたのです。そして、その女性の言葉と態度に驚き、イエス様の元へと出かけていった村人たちも、イエス・キリストと出会った後に、その女性にこう言うのです。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです」。私たちができることは、あのサマリアの女性のように、私たちの周りの人々をイエス様の元へ連れてくることなのです。イエス・キリストに出会うことで変えられたパウロは、迫害する者から迫害される者に、自分の力を誇る者からまったく力のない者へと変えられました。けれども、その土の器の中に収められたキリストの光を、パウロは語らずにはいられなかった。それまで自分が頼ってきたすべての力が、塵あくたのように思えるほど、パウロにとってイエス・キリストとの出会いはすばらしいものであり、どんなに迫害されても人々に伝えずにはいられなかった。パウロはキリストと出会うことで、イエス・キリストの福音を伝えずにはいられない伝道者に、福音を宣べ伝える宣教者へと変えられたのです。それが、パウロの回心の出来事でした。

私たちも、イエス・キリストと出会うことで変えられた喜びを、教会に来ることが嬉しくてたまらないその嬉しさを、多くの人に伝えずにはいられない。そんな思いを、礼拝を通していただきたいと願います。

お祈りしましょう。